現代英語の慣用と辞書・語法辞典等の記述

—— though, although の場合 (2) ——

外 山 敏 雄

前稿[1]では，though, although の使用頻度と，それらが sentence 中で占める位置について今日の英語の慣用を調査し，それを辞書・語法辞典等の記述と比較してみたが，actual usage と辞書・語法辞典等の記述との間にかなり大きな食違いが認められた。そして，そのような食違いは，actual usage が戦前から今日にかけてかなり大きく変化しているのに辞書や語法辞典が概ね過去の記述をそのまま踏襲していることから生じていることをうかがうことができた。

though, although の語法については，前回取扱い得なかったもので検討を要する事項が残されているであろう。ただ，最近調査報告の見られる事項について，敢えて屋上屋を架する必要はないと思われる。そのようなことも考慮に入れて，今回は次の事項に限って前回と同趣旨の検討をしてみることにする。

(Al)though..., yet (*or* still, nevertheless)....

'yet', 'still', 'nevertheless' 等の conjuncts が 'though', 'although' などの接続詞と相関的に用いられる表現であるが，過去の時代のものにはこのような表現が容易に見出される。試みに，N. Hawthorne の *Biographical Stories For Children* (1842) を開いてみると，冒頭に近く

> *Although* Mr. Temple was scrupulous to relate nothing but what was founded on fact, *yet* he felt himself at liberty to clothe the incidents of his narrative in a new coloring, so that his auditors might understand them the better.[2]

という用例がすぐ目につく。

このような表現をめぐる今日の英語の actual usage はどうなのであろうか。そして辞書や語法辞典はそれを正しく記述しているであろうか。corpus として用いたものは，今回も前稿の場合と同様である。

資料 1, *Reader's Digest* (U. S. Edition), 1970, 4 numbers
資料 2, *The New Yorker*, 1972, 4 numbers
資料 3, *Tenno in Europe*, 1971[3]
資料 4, *The Legacy of the Stiff Upper Lip*, 1969 (Penguin Books)
資料 5, *Henry's War*, 1967 (Penguin Books)
資料 6, *A Common Language*, 1967 (Kenkyusha ed.)

(1)

はじめに，内外の辞書や語法辞典の記述を検討してみることにする。

英米の辞書・語法辞典では，この構造にふれているものは意外に少ないのである。

まず語法辞典の類であるが，MEU にはこの構造に直接ふれた記述は見出されない。基本的に MEU と同じ立場に立って，その第1版の欠をおぎなう目的で書かれたものとされる UAA[4] には，'although ... yet' の項がある。その記述を要約すると，「比較的短い文では 'although' と 'yet' をともに用いる必要はないが長い文では一緒に用いることが多い。いずれか一方をはぶくとすれば 'yet' の方を除く。」ということになろう。[5]

英米の語法辞典で直接この構造について記述しているものは，ほかには筆者の目にふれなかった。これは，もちろん，語法辞典の範疇には入らないものであるが，最近のものとして，Quirk *et. al.*[6] の記述をとりあげておきたい。同書の 'Conjuncts as correlatives' の項には

> 'Some conjuncts can correlate with the subordinator of a previous clause to reinforce the logical relationship between the clauses.'

と説明した後，次の文をあげている。

> *Though* he is poor, *yet* he is satisfied with his situation.

そして，'conjuncts that reinforce particular subordinates' で concession を表わすものを次のようにまとめている。[7]

	yet
	still
although	however
(even) though	nevertheless
while	nonetheless
granted (that)	notwithstanding
even if	anyway
	anyhow

なお，同書は，さらにこれらのものを 'correlative subordinates' と呼び，その speech level にふれて 'a formal and deliberative style of writing or oratory' に属するものである，と説明している。[8]

Quirk *et. al.* にはこのように記述されているが，ここでもう1つ，Quirk *et. al.* の共著者の1人である S. Greenbaum の著作[9] を参照しておきたい。同書のこの構造についての説明も Quirk *et. al.* の場合とほとんど同様である。[10] そして同様に1つの例文をあげている。

> *Although* they did not like the music, *yet* they applauded vigorously.[11]

ただ，この文は説明文の途中に，出所を示さずにあげられている文なので，'the Survey corpus' から実際に引用された文ではないであろう。ここでは，そのことに注意しておきたい。

英米の語法辞典から文法書にわたって見てきたわけであるが，辞書類はどうか。一とおり当ってみても今日の英米の辞書類の中には，なぜかこの構造の用例はあまり見出されないのである。Thorndike・Barnhart の CDD[12] が

> 'though rebuffed, he still tries' (s.v. *still*)

という，問題の構造とは異なる，副詞機能の 'still' が続く用例をあげるほかは，次のような時代的にかなりさかのぼる2つの例が目についただけである。

> *though* they curse, *yet* bless thou ——COD[5], POD[5] (s.v. *yet*)

Though he slay me, *yet* will I trust in him. [Job 13 : 15 (A.V.)]

——Webster III (s.v. *though*)

このように，英米の辞書では，有力な2・3のものにarchaicな用例を見る程度である。結局，Partridge, Quirk *et. al.*, Greenbaumなどの記述から，現代英語においてそれ相当に用いられる，という判断を得ることになろう。

では，わが国の辞書や語法辞典ではどうであろうか。わが国のものに目を転ずると，かなり多くのものに，この構造についての記述を見出すことができる。

まず，語法辞典であるが，いくつか目についたものをあげてみる。大塚『新英文法辞典』(1970) は，「この語 (i. e. *yet*) はしばしば though と相関的に用いられ……」(下点筆者) として，

Though we are going, *yet* we shall return.

の例をあげている (p. 193)。当然，この語法の使用頻度は高いものという印象を受ける。同じ編者の『英語表現辞典』(1969) では，「yet はとくに文が長くなったとき用いられる」(s. v. *although, though*) と Partridge と同じ趣旨である。また，田桐『英語正用法辞典』(1970) では，

Though he was ill, *yet* Jiro went to his company.

を，*Though* he was ill, Jiro went to his office. と並べて正用法として示す (s. v. *though*) にとどまっている。発行年代が少し古いが，上本佐一『語法雑記』(1953) には，「文章体では Emphasis のため (Al)though...yet (*or* still, nevertheless) の形をとることがある。……(al)though と連関するものは，気持の上での差はあるが，yet, still, nevertheless の順序に少いようである。」(s. v. *although*) と説明されている。

英米の辞書類にはあまり記述が見られないのにたいし，英和辞典では，多くのものが何等かの形でこの語法にふれている。以下，主要な英和辞典の記述を略記してみる。研究社『新英和大辞典』(1960) は Although..., (yet).... の例をあげ (s. v. *although*)，「しばしば従節の (al) though と相関的に用いられる：though deep, yet clear」(s. v. *yet*) としている。岩波『英和大辞典』(1970) は，

'(though) deep, yet clear' (s. v. *though*)

'Though rebuffed, he still tries.' (s. v. *still*)

という例をあげている (後者は Thorndike・Barnhart の用例の借用か?)。また，研究社『新英和中辞典』(1971) は，「although, though の導く節が文頭に来る時，その意味を強調するため主節にさらに yet を用いることがある：(Although [Though]..., yet.... の用例)；この yet は〔文語〕で特に文が長くなった場合に用いられる。」(s. v. *although*) としているが，さらに，*still* の項には

Though he did his very best, he *still* failed.

の例があげられている。そのほか，三省堂『カレジクラウン英和辞典』(1964) でも同様に Although..., yet.... の例があげられている (s. v. *although*)。新しいところで，研究社『現代英和辞典』(1973) では，同社『新英和大辞典』のあげる例文中のカッコに包まれていた 'yet' からカッコが外された点を除くと，同辞典と全く同文である。

以上，わが国の辞書・語法辞典の記述を見たが，要するに，わが国のものでは多くのものがこの構造を，現代英語においてかなりの頻度で用いられるもの，として記述していると解釈してよいであろう。

(2)

以上，辞書・語法辞典を中心にこの語法についての記述を検討してみたが，では，この語法をめぐる今日の actual usage は，はたしてどうであろうか。

まずはじめに，今回おこなった調査の結果を結論的に数字で示すことにする。

前稿ですでに明らかにしたとおり，conjunctive adverb としての 'though'，および，実質的にはそれに近い機能を果す ...—(al)though.... のような場合を別にして，'though'，'although' が譲歩の接続詞として用いられているものは，6つの調査資料全部で，though 136, although 141, 合せて 277 であった。この 277 の用例中に問題の構造はいくつあるか，というと，実は皆無なのである。Partridge などの言う 'long sentence'（従節が相当の長さに及ぶ用例がかなり目につく）においても，主節の先頭に 'yet'，'still' 等の置かれた例は見られない。

このように，今回の調査では，問題の構造はついに1例も見出せなかったが，この構造に関連して，調査の結果から1つ顕著な事実を指摘しておきたい。

(Al)though..., still.... の構造は corpus の中には皆無であったが，

(Al)though..., ...still....

のように，主節の主語よりも後の位置，つまり，動詞の前後の位置に 'still' が置かれ，それが，先行する従節の (Al)though と何等かの相関関係を保っている場合が目立つことである。[13] 数にして，全資料合せて 9 例である。though-clause の先行する場合が 5 例，although-clause の先行する場合が 4 例である。その先行する節の長さは，9 例について見る限りは，although-clause の場合の方が概してより長い。

'still' の位置をこまかく見てみると，最も多いのは，

S × 'be' × 'still' × V-ing....

のタイプで，9 例中 4 例を占める。例えば

Although U. S. balance-of-payment losses caused by our troops in Europe are largely made good by West Germany, we are *still* spending a great deal more on defense, proportionately, than our NATO partners. (資料 1, May '70, p. 125)

Although a policy of responsibility was settled on as much in the interests of profit as out of decency, to observe it in action is *still* encouraging. (資料 2, Jan. 15, '72, p. 77)

などである。[14]

残る 5 例のうちに

S × 'be' × 'still'....[15]

S × 'still' × 'be'....[16]

のタイプがそれぞれ1例ずつあるが，残り3例は

S×'still'×V....

というタイプである。うち2例を引用しておく。[17]

Though the sun was nearly four hours high, the night's coolness, typical of the High Plains, *still* hung in the air. (資料 1, August '70, pp. 37–38)

Although he contented in November, 1944, that "if there is a breakdown in the parleys it will be the fault of the Government and not the Communists," and although he told President Truman in May, 1945, that the Communists were holding back "in my opinion with some degree of reasonableness," Hurley *still* backed the Nationalist regime to the hilt, and in the spring of 1945 even reimposed the ban on nonmilitary travel by Americans to the Communist headquarters in Yenan. (資料 2, Jan. 8, '72, p. 51)

このように，今日の英語においては，過去の英語に見られた (Al)though-clause にすぐ後続する接続詞的な 'still'[18] の例は見られず，'still' の，主語よりも後の位置への「後退」がかなりはっきり認められるのである。しかし，(1) で見たように，この語法については，1・2の辞書に用例が見られるだけで，語法辞典の上では未だ存在が認められるに至っていない。

なお，(Al)though-clause に後続して 'nevertheless', 'nonetheless' が用いられるケースは，調査資料の範囲内には見られなかったことを付言しておく。[19]

以上，問題の構造に関連して調査結果の要点をあげ若干考察を加えてみた。今回の調査は限られた corpus によるものではあるが，少くとも今日の傾向をうかがうことは可能であろう。辞書・語法辞典（文法書）の記述にもかかわらず，現実には標記のような相関的表現が用いられることはほとんどない，とみてよいであろう。そして，'still', 'nevertheless' などの，主語の後の位置への後退が見られるのである。

やはりこの場合も，辞書・語法辞典等の記述は actual usage とかなり距っていると言わなければならないであろう。辞書・語法辞典等の記述は当然，ことばの現実に即して改められねばならないであろう。

(3)

最後に，問題の構造をめぐることばの現実は，今日の英語の流れに照らして，どのように解釈されるか，そのことにふれて稿を結びたい。

端的に言って，この構造が好まれないのは，それが現代という時代の，文体にたいする人々の好みに合わないからであろう。(Al) though-clause を前置するだけでも固い感じを生むのに，その上，さらに 'yet' を加えることなど，人々の求めるところとはならないのであろう。'still', 'nevertheless' などの後退はその1つの表われと見ることができよう。

また，現代の簡潔性への志向ということも，標記の構造が今日好まれない傾向を説明するであろう。なぜなら，(Al)though-clause に続く 'yet', 'still' などは，元来 redundant なものであり，必ず無くてならぬものではないからである。それは今日の，sentence の長さが短縮化する傾向とも無関係ではないと言える。

この構造をめぐることばの現実の中にも，われわれは現代英語の簡潔化，informal 化の動きの1駒を見るのである。

まこと，言語は変化して止まないのである。

(49年8月12日稿)

—— 註 ——

1) 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第7巻1号，1974年8月.

2) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. 6, Ohio State Univ. Press, 1972, p. 220.

3) 前稿の場合と同じく英紙の記事だけを調査した.

4) Eric Partridge, *Usage and Abusage*, 1965[6].

5) なお，同書の縮約版に *The Concise Usage and Abusage*, 1961[3] があるので，その 'although... yet' の項の全文を掲げておく.

'To use both in a short sentence ('Although he returned only yesterday, yet he left again to-day.') is unnecessary, but to imply that *although...yet* is always redundant is wrong, as can be seen from almost any long sentence. In long sentences, as also in short, *(al)though* posits a handicap, an obstacle, or an advantage, and *yet* emphasizes the result—the victory or the defeat. Of the two, *yet* is, in any sentence, the more safely ommitted, for the ommission of *(al)though* leaves the sentence unresolved for too long, as in 'He came only yesterday, yet he departed this morning.'

6) R. Quirk., S. Greenbaum., G. Leech., & J. Svartvik, *A Grammar of Contemporary English*, 1972.

7) ibid., p. 528.

8) ibid., p. 728.

9) S. Greenbaum, *Studies in English Adverbial Usage*, 1969.

10) 'It (i. e. immobile conjunct 'yet') may, indeed, reinforce the effect of the subordinators *although* or *though* that introduce the previous clause.' (p. 63).

11) ibid., p. 33.

12) *Thorndike・Barnhart Comprehensive Desk Dictionary*, 1951.

13) もっとも，そのような位置に置かれた 'still' と，主節の先頭に置かれたそれとの間に機能の上で相異があることは看過し得ないであろう．節の先頭に置かれれば，ほとんど接続詞に近い機能を果すであろうが，主語より後の位置をとれば，当然「接続」の働きは後退し，動詞との関係が前面に出てくるであろう．その点については，'yet' についても本質的に同じであろう．両者とも，主語より後では temporal meaning を帯びた副詞として機能することとなる．ただ，'still' は 'yet' と異り，主語よりも後に置かれて temporal meaning をもつ副詞の働らきをしながら，同時に concessive meaning をもつことがあるわけである．S. Greenbaum の説明をあげると，

'*Still* may appear in a non-initial position with a meaning close to *nevertheless*, but it also retains some of its temporal meaning.' (p. 65).

それにたいして 'nevertheless' は元来 concessive meaning だけしか持っていない ('nonetheless' も同様であろう)．当然そこから mobility というものが出てくることになろう．これが，S. Greenbaum の言う 'mobile conjunct' (cf. pp. 33, 64) である．

結局，concessive meaning について見れば，yet, still, nevertheless (nonetheless) 等の mobility は，後のものほど大きいことになろう．

14) Quirk *et. al.* は

Still often blends concessive and temporal meanings.

として

It's very late and he's still working.

の例をあげているが，この例の 'still' が concessive meaning を持つとすれば，これらの Although..., ...still.... の文の 'still' が concessive meaning を帯びていることは疑いないものと思われよう．

なお，他の 2 例の所在箇所は，それぞれ，資料 4, p. 21 (Though-clause が先行)，資料 5, p. 148 (Although-clause が先行) である．

15) 資料 2, Jan. 8, '72, p. 74 (Though-clause が先行).

16) 資料 1, May '70, p. 234 (Though-clause が先行).

17) もう 1 つの所在箇所は，資料 4, p. 91 (Though-clause が先行).

18) たとえば，前稿で戦前の英語の資料としてとりあげたものの中に次の用例がある．

A faint spot of colour appeared on Louise's pale cheeks and *though* she smiled *still* her eyes were hard and angry. (*Modern Short Stories*, 1939, p. 69).

19) 調査資料の範囲外に次の例が見られた．

Although it was clear then that Nixon probably wouldn't lose many votes if he failed or gain many if he succeeded, it was *nonetheless* a rather daring diplomatic enterprise, and although it could hardly have been planned as a surefire political coup, it seems to have worked out that way. (*The New Yorker*, Dec. 18, '71, p. 84).

Although *un*-compounds with verbal bases can have only restricted active-passive clause transformation potential, their constituent structure bears, *nevertheless*, great resemblance to that of noncompounds with verbal bases.

(J. Svartvik, *On Voice in the English Verb*, p. 24)

これらの 'nevertheless' の場合も，'still' の場合と同じく，それが主節の先頭に置かれていないことに注意したい．